

---

# 勇者軍VS魔王軍 ～ 攻防最前線の真実～

高坂桐乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者軍VS魔王軍　～攻防最前線の真実～

### 【Nコード】

N6377C

### 【作者名】

高坂桐乃

### 【あらすじ】

皆さん、突然ですが「正義は必ず勝つ」ということをご存知ですか？ご存知でしょう。では敵キャラがどんな仕打ちをうけているか皆さん知っていますか？皆さんは勇者たちの活躍にしか興味が無い。敵のことなど知らない。そう思っているでしょう。では、とある勇者達と魔王達を見ながらその真実を探っていきましょう。では、ごゆっくりとお楽しみください

## プロローグ（前書き）

魔物視点の物語。グロイかもしれませんが。勇者のイメージを崩しています。

15禁では無いという事にしました。実は15禁小説ではないので

## ブローグ

皆さん、突然ですが「正義は必ず勝つ」ということをご存知ですか？  
ご存知でしょう。では敵キャラがどんな仕打ちをつけているか皆さん知っていますか？

皆さんは勇者たちの活躍にしか興味が無い。敵のことなど知らない。  
そう思っているでしょう。では、とある勇者達と魔王達を見ながら  
その真実を

探っていきましょう。では、ごゆっくりとお楽しみください

## プロローグ（後書き）

実は実は、18禁小説にしたかったが。

15禁で我慢しよう。でも15歳未満も安心して読める小説です。

## 魔王の城……

ここは、魔王の城。薄暗く、汚く、かび臭い、そんな城の外壁も内部に劣らず汚かった。一部の外壁は崩れていた。

そんな城の中心部、王の間には、黒い布をかぶったガキ……ではなく、

お姉さんがいた（魔王に脅されて言い換えたらしい）

その部屋は、かなり広かった。大きな窓には黒色のカーテン、今魔王の座っている玉座は

その部屋に付け足したものだだった。その玉座からは入り口に続く紅いじゅうたんが敷かれていた。その部屋の天井にあるシャンデリアはその部屋の大きさに劣らず大きかった。だが、ロウソクに火は灯っておらず、

その部屋の光は、カーテンがかかっている窓から漏れるかすかな光のみだった。

そして、そんな部屋の大きな出入り口の扉はというと……  
……この部屋に似合わず、普通の扉の二倍程度だった。  
そして、いきなりその『普通の扉の二倍程度』の扉が開いた。

「魔王様！古代遺跡と草原の間の小さな村で勇者団が誕生しました！」

血相を変えて飛び込んできたのは、魔物の中で魔王の次に強いといわれているガーゴイルだった。

私が血相を変えて飛び込んできたというのに魔王様は

「あつそ」

と、流してしまった。

このガキが……！私は心の中でそう呟いたが、魔王様の前でそんなことを言ったら首が飛んでしまう。

「魔王様、これは一大事ですよ！最近あちこちで

勇者団が結成されているのですよ……！」

「でも全て壊滅した。全ての拠点は守られているさ」

私が必死に言っているというのに……

この歡樂主義者め……！今は抑えておこう。

「魔王様、今の状況をご存知なのですか？」

草原所属部隊は壊滅状態、古代遺跡所属部隊は白蛇の数が激減、

300匹がたつたの50匹になってしまいましたし、

蜂の巣駐屯部隊は戦闘能力が不十分、山間の村で敵軍は補充ができません」

私が早口でそこまでしゃべり、続けようとするとう魔王様が話を止めた。

「心配性だね……ガーク。古代遺跡には、ラピスへ補充部隊として向かっている

ガーゴイル二ひ……いや、二人を古代遺跡に向かわせてくれ」

魔王様はガーゴイルを二匹と言いつうになった。

無理もない、人間達は魔物を動物のように呼んでいるのだ。

差別だ、魔物にも権利はあるはずだ！

「しかしな……、何故魔物は差別されるのだ、私は世界を平和にするために世界を征服するのだ。断じて私利私欲のためではないのだが……」

「確か魔王様は、戦乱の世を終わらせるために戦って、  
ようやくこの国を平和にしたのですよね？」

魔王軍が結成される前は、この国のあちこちで内乱がおきていた。  
国土も、外国に取られて昔の60%になった。

ここからは魔王様の長い愚痴に入る。読み飛ばしてもらいたい……



## 魔王の苦悩

「我々は内乱をおこした者達しか殺していないのだぞ！勇者団も全て気絶させて逃がしているのだぞ！何故差別させるのだ！正義のために戦っていてなにが悪い！王の座も前国王から正式に受け継いだのだぞ！それが何だ！前に取られた国土も半分は取り返したのだぞ！それなのに人間達は私を殺して王の座を奪おうとしているのだぞ！私達が魔物だと言う理由から！建前はそうだが、本音は私を殺して王の座を奪い取ることだ！これまで魔王軍はこの国内の市民のを殺したか！何故か殺したということになっている！濡れ衣だ！」

魔王様はそこまでしゃべると、いったん水を飲み「ふう」と、溜息をついた。

「ガーグ、その他の戦力増強は君に任せる。  
特にラピスとコロシラムを落とされたらかなりの痛手になる」

魔王様はそう言うと、部屋を出て行った。

多分『闇ちゃんのお部屋』に行ったのだろう。

「……考えるときき出してしまった。魔王様に見られていたら即死刑だった。」

私は、伝達スライムのところへ行った。

伝達スライムとは、情報を伝達するスライムのことだ。スライムベスもいる。

伝達スライムは、修行をして超能力が使えるようになったとか。うそ臭いが。

「嘘じゃ無いですよ、ガーグ様。今日はどんな伝令ですか？」

いきなり伝達スライムが話しかけてきた。

まあ、超能力は嘘じゃないと思っておこう。

私はしばらく考えた。魔王様に他の戦力増強を私に押し付けたのだから。

「じゃあ、ラピスへ向かっている双子のガーゴイルを古代遺跡へ。

蜂の巣には、分裂スライムを1人送ってくれ。草原には

ウイスプ10人と、分裂スライムを5匹を向かわせる。そして、山間の村を、

オグア隊で攻めてくれ。以上だ。」

私はそう言い終ると、立ち去ろうとした。だが、伝達スライムに呼び止められた。

「えっと、ラピスとコロシウム、峡谷はどうします？」

私は少し考えると、

「オグア隊に第3戦力補充スライム隊を連れて行くよう言ってくれ。スライム隊はコロシウムへ留まらせてくれ。

ラピスへは、第6戦力補充火山隊に行ってもらう」

伝達スライムは、了解、と言って部屋に入っていった。

・・・何をしているのか気になる・・・

だが、そんな心を抑えて私は王の間へ戻った。

\* \* \*

「ほにゃほにゃ~~~~ほにゃほにゃ~~~~」

その画面の前のアナタ！初めまして、伝令スライムのスラリーっす。

今超能力を使って伝令を伝えているところだけど、応答がねえっす。

尾語に『っす』をつけるなっすか？ダメっす。これだけは譲れねえっす。

．．．．ガールゴイルの兄弟め．．．．！何処かで道草を食ってるっすな！

## ガーゴイルの兄弟

そのころガーゴイルの兄弟、ガーレフト&ガーライトは……

「うむ、草もなかなか旨いな、弟よ」

「うむ、確かに旨いな兄よ」

最初にしゃべったのが兄のガーライト、その次がガーレフトらしい。二人は、海峡からラピスへ続く道の脇に生えている草を茹でて食べていた。

……文字どおり『道草を食っている』

そんな時、ガーライトの目がカツ！と開いた。

「伝令が入ったようだ弟よ」

「じゃあ、聞いておいてくれ兄よ。俺は草を茹でておくぞ兄よ」

この兄弟、アホではないのか？というツツコミを入れないでもらいたい。

魔物にも個性はあるのだ！ by 闇ちゃん      という格言もあるからな。

「ほにゃほにゃ……ほにゃほにゃ……」

この伝令方法はスラリーか弟よ。

俺はすぐに応答するぞ弟よ。

「こちらガーライトだ弟よ」

「どうも、スラリーです。あと、弟よって入れないでもらえます？」

やはりスラリーか弟よ。しかし、それぐらい良いではないか弟よ。

「お前も    つす    と入れるのを我慢するのはつらいだろう弟よ。」

それと同じなのだ弟よ」

なるほど、確かに一理あるっす。

ちなみに目上の人には了解を得ない限り『っす』をいれないことにしているっす。

「じゃあ、私も入れるっす。伝令は、移動先をラピスから古代遺跡へ移動することっす」

「何故だ弟よ。ラピスを固めるとのことですラピスへ補充に向かっているのだぞ弟よ」

「ラメス村で勇者団が結成されたらしいっす。早めに潰したいらしいっす。ガーグ様がそういつてたっす」

納得したぞ弟よ。だが実際、熱いところが好きなのだ弟よ。だが命令なら仕方が無いな弟よ。

「わかったぞ弟よ。たしかラメス村は、古代遺跡と草原の間にあつたな弟よ」

「そうっす。他にも伝令があるのでもう通信を切断するっす」

「わかったぞ弟よ」

そこまで話し終わるとスラリーは、「ほにゃほにゃとほにゃほにゃと」と、通信を切断した。

最近は何事だな弟よ。少なくとも緊急配属先変更は最近無かったのだ弟よ。

俺は、弟にそのことを告げると、草を食ってから古代遺跡に向かったのだ弟よ。

## 勇者団御一行……

一方こちらは勇者団御一行……

「あゝあ、もう歩くの疲れたゝゝゝ」

そう叫んでいるのはこの勇者団唯一の魔法が使える赤髪のマゼンダだった。

村では木を100本ぐらいと家を3軒を消滅させたらしい。

年齢は秘密らしいが15〜19歳前後。性格は大雑把、面倒なことが嫌いで、わがまま。

「若いのにそんなことを言っていると、歳をとってからもっと大変になるぞゝ」

「お前も十分若いだろー!」

年寄りくさくて、鎧を着ているあの青年、ジルバは村で兵士をしていたらしい。

年齢は22歳。一般的には青年と呼ばれなければならないのだ。多分精神年齢は80歳ぐらいなのであろう。

そしてツツコミを入れていた青髪で簡単な鎧を着ている、

弓矢を装備しているこの少年はブルース。この勇者団最年少の14歳。

弓矢の腕は村一番で、100メートル先の蟻も射貫けるとか。

視力は測定不能ぐらい良い。だが性格はまだ子供。

「じゃあ、ここら辺でお昼にしましょうか？」

笑顔でマゼンダに話しかけるウェーブのかかった金髪の少女はテミ。

その笑顔の裏には何かが潜んでいるという。(by ブルース)

村では誰にでも優しくった。だが、かなりの腹黒らしい。

人をだますのが得意で、多分今もっているお昼というのも多分……  
・（喉元に短剣をつきつけられた）  
16歳。ちなみに回復役で、牧師の娘らしい。

「……もう少し我慢しろ、今日中に古代遺跡に着かねばならない」

このぶつきらばうな顔をした後ろで髪を束ねている金髪で、マントを風になびかせているこの青年、ブロントはこの勇者団のリーダー。

年齢は20歳。冷静沈着で、決して『！』を使わないらしい。作戦を立てるのが得意で、剣の腕もなかなからしい。

超能力は使えないが、伝令に使う超能力を捕らえて解読できるとか。ちなみに魔物ならこの能力は必ず備わってるらしい。

と、いうことは……（テミに突きつけられていた短剣が少し肌に食い込んだ）

「何でよ……！！良いじゃない別に！！」

「ワシだって疲れたんだ、別にいいでは無いか……！」

マゼンダとジルバの講義を受けて、ブロントはこう言い放った。

「黙れ。後で話す。今は古代遺跡へ向かうのがさきだ」

かなり威厳があった。それを聞いた二人は渋々歩き出した。

## 古代遺跡（前書き）

物語は深くなるようにしました。



## 古代遺跡

歩き始めて15分後、『古代遺跡へ 後500m』という看板が見えた。

そこにマゼンダは座り込んだ。

「どうしたマゼンダ、若いのにもうへばったのか？」

ジルバの問いに対しマゼンダはジルバをキツッと睨んだ後ブロントの方を向いてぶっきらぼうに言った。

「そろそろ聞かせてくれる？古代遺跡へ行くのを急ぐ理由を」

ブロントはしょうがないという顔をしてため息をつくと話し始めた。

「さつき魔王軍の伝令を捕らえた。古代遺跡にガーゴイルが二体来るらしい。

多分普通のガーゴイルよりかなり劣っているだろう。

だが、今の我らには十分不利になる。そうなる前に古代遺跡を

制圧して、ガーゴイルを迎え討つのだ。わかったらさっさと歩け」

ブロントはそう言い放ち、マントを風になびかせてさっさと歩いていった。

ブルースとテミも歩き始め、自称年寄りのジルバもゆっくりと・・・ではなく

普通に歩いていった。どうやら肉体年齢は青年のようだ。

マゼンダは文句を言いながら渋々と歩き始めた・・・

古代遺跡・・・そこは魔物と妖精が共存する場所

妖精のみでは他の種族には勝てない。

そして魔物だけでは心細いのだ。何より回復要員がないので妖精にやってもらっているということだ。

だが、魔物は妖精を攻撃しないのは何故か？

答えは簡単。だが、別に答えは『簡単』だということではない。

妖精族が滅びる、又は古代遺跡からいなくなると

古代遺跡は崩壊し、妖精を滅ぼした種族は立ち入ることができなくなる。

そんな場所に声が飛んだ。

「ゴーン様、勇者団が来ました！」

この声の主は白蛇隊の隊長のスネスだ。

そして私はゴーン。この古代遺跡駐屯軍の部隊長だ。

「ご苦労。よし、すぐに第3種戦闘配置につくように号令をかけてもらいたい」

\* \* \*

その時後ろからフワツとした光が近づいてきた。

私は反射的に後ろを向いた。

そこにいた者とは……

「また人間かあ？ 全く物騒な世の中になってきたな……」

「あ、ティンク様でしたか。」

「ああ、そうそう。妖精達は皆第3種戦闘配置に着かせたぞ」

この妖精はティンク様、妖精族の長だ。

妖精族……大体人間の顔程度の身長で四枚の透き通った羽根があり  
薄い緑色の髪が特徴だ……

「いつもいつもすみません……」

私は軽く頭を下げた。ティンク様は フツ と笑い

「我々もここを守らねばならん。それにアイツはここの出身だから  
なあ、手伝うのは当然だ」  
と軽く言ってから近くの岩に座った。

そう言えば確か魔王様は妖精族だと言っていたが……

時は今から50年前……

## 妖精族、エルフ族、精霊族の過去

回想シーンが始まる前にティンク様に忠告をせねば・・・

「ティンク様、ゲームでは岩の上に移動することはできないのですが・・・」

「良いではないか、飛ぶのが疲れたのだ」

五十年前、ここ古代遺跡には妖精族の他にも精霊族やエルフ族が住んでいた。

この地は平和そのものだった。

だが、五十年前のあの日・・・

・・・人間族が襲ってきたのだ・・・

人間「うおおおおらああああああ！！！！」

・・・人間たちは荒れ狂い、手当たり次第に我らの仲間を斬っていった・・・

我はとつさに仲間たちに隠れるように指示した。

ある者は岩陰に、またある者は木の陰に・・・

妖精族はこうすることしか出来なかった。元々魔力が高かったのだが  
まともに遣り合えば全滅する、我はそう判断して指示したのだった。

エルフ族は勝てないと判断し、古代遺跡から逃亡。だが人間族の追  
撃を喰らい

数が激減したらしい。当時の30%の50人に・・・

そして今はジャングルで暮らしているらしい。

だが、精霊族は違った。

元々精霊族は書が無くても魔法を使えた。炎の精なら炎を、  
大地の精なら大地を操ることができ、気のせい・・・ではなく  
木の精は木を操る・・・その力は強大だった。

だが、精霊族の数は他の種族に比べてかなり少ない。

その時はたったの10人しか居なかったのだ。

対して人間族は300、勝てるはずはなかった。

古代遺跡に居た精霊族は、光の精・木の精霊・風の精・水の精霊・

火の精・命の精霊・雷の精霊・音の精そして・・・闇の精。

ちなみに、精霊と精の違いは強さの違いらしい。詳しいことは知ら  
ないが・・・

精霊族は強いが、脆いのだ。精霊族は本体・・・丁度野球ボー  
ル程度の

大きさの球体があり、その周りを魔力で体を作り出している・・・

実際は幻影に近いのだが。

その幻影は何度が斬りつけるだけで消滅する。消滅した後に残る本体は無力、抵抗する力は皆無だ。出来ることといえば

逃げるか隠れるのみ。幻影の生成には早くて一時間はかかるのだ・

・

人間族との戦いがどうだったかは隠れていたので知らない。

だが戦いが相当激しかったのは聞こえてくる絶叫の声、雷鳴や時々辺りが明るくなり人間族の悲鳴が聞こえる、その事で大体はわかるのだ・・・・

その後、地を揺らし木をへし折るがごとくの爆音に近い音が辺りを包み込んだ。

・・・・・しばし沈黙の後、我は隠れていた場所から戦いがあった所と見た。

そこには人間の原型を辛うじて残している屍骸、所々焼けており深い穴が開いている地面、

崩壊している遺跡の一部、そして・・・・・

息を切らしながら辛うじて立っている闇の精が目映った・・・・・

・

「闇い！」

我は思わずそう叫んだ。ちなみに 闇 とは闇の精の略だ。  
我は回復の杖を持ち出し闇の側に行き、杖を振った。  
杖は眩い光の粒を放ち、その粒は闇に降りかかった。

その後、闇は回復した。あの戦いから一ヶ月後の事だが。  
その後、北にある魔物の住む城へ向かった。魔物を引き連れ  
人間を滅ぼすため……では無かった。二度と争いの無い  
世界を作るために……

「そうだったのですか……」

ゴーンはそう呟くと北の方を向いた。  
我も北の方を向き、呟いた。

「そうだったのだ……」

戦闘！

「ブルース、殺れ……………」

一方こちらは勇者団御一行様、古代遺跡に近い茂みに隠れています。ブルースはプロントの命令をはいはいと聞き入れて矢の先を紫色の液体に浸した。毒薬というやつだ。ブルースは何本かを毒薬に浸した後木の上に登りそこから矢を放った。矢は宙を滑るように走りキラスネークを貫いた。蛇は数秒もがいた後息絶え、動かなくなつた。尤もキラスネーク相手に毒薬など不要ののだがプロントは念のため……………と言っている。

敵襲に気がついた愚かな蛇達は獲物を仕留めようと木に向かって進軍してきた。

遠くの敵はブルースによって射抜かれ数が減る、例え木の下に来る事が出来てもプロント達によって無残な姿になる。

ちなみに防御力が低い妖精族は前線に出るということは無いのだ。自分達が一番大事だと言うことだろう……………

\* \* \*

「我こそはスネイルなり……………！」

その言葉を言い終わらない内にスネイルとかいう可哀想なキラスネークは

ブルースに撃ち抜かれた。しかし、その後ろからはスネイルだとかスネイルだとかスネタとかスネルが 全部キラスネークだが 次から

次へとプロント達の方へ突進してくる……………名前を言ってから攻



撃するより

無言のまま攻撃した方が良いという事が解らないのか？

辺り一面白と紅に染まったとき、ようやくキラースネークにも知恵が付いたようだ。

「皆！突進したらだめなのさ！！遺跡の守りを固めるのさ！！」

・・・それが普通だと思うが      そんな言葉がブロントの脳裏を過ぎった

かもしれない。

古代遺跡の北入り口付近

ちなみに古代遺跡には東西南北に各

一か所ずつ

入り口があります、とはテミ談だ      は、かなりの数のキラース

ネークで覆われた。

「・・・すでに三百匹は死んでいるのにまだあんなに居やがる・・・ッ！！」

「しかも入り口が完全に封鎖されてる・・・しかも外壁の上の通路は

キラースネークがうようよ居るし・・・どうするのよブロント」

そう言いながらもブルースとマゼンダは遠距離から炎と矢の雨嵐を降らせている。

だが、ブルースの弓筒は既になにかかっているし、マゼンダは炎の書の呪文を

読み上げるのに舌をかみながらだし・・・だが、一向にキラースネークの数は減らない。

頻繁にキラースネークが光っているの、多分妖精が回復しているのだろう。

だが、他の者はうかつには近づけない。何しろ炎と矢の雨嵐だし、キラーズネークが飛びかかってくる可能性も……

「マゼンダ、壁を魔法でぶち抜け」

「無理よ。だって上級魔法は呪文が長いから絶対に舌かむから」  
フロントが言葉を言い終わってから0・1秒も時間がたったとは解らないが、

それぐらい早くにマゼンダが即答と速答した。

ちなみに、呪文は途切れたら最初からやり直しなのである。

「……………そんなに早く言葉を発することが出来るのか？」  
「……………あ。ホントだ。でも呪文は苦手なのよ」  
……………情けない……………とフロントは呟いたとか  
呟いていないとか……………

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6377c/>

---

勇者軍VS魔王軍 ～ 攻防最前線の真実 ～

2011年7月24日19時56分発行